の暴虐無道なことを叫んで已まない。然し是は資本主義新聞としては惟しむに足らぬ。それ等の新聞は元々資本家が勞働階級に對する鬪爭の武器として作つたものであるから、さういふ新聞が他四の勞働者を脅かす目的で　最初の勞働者革命にあらゆる論證を加へるのは、當然の義務である。けれども曾ては、修正派に對して無產者の獨裁を主張したマルトフやカウツキーのような社會主義者が、力を使用した廉で、革命を批難するのは何故であらうか。

獨裁とは一體何を意味するか。それは一方の階級が他の階級に向つて、容捨なく自己の意思を强制する政治組織である。一方の階級が單に權力掌握の準備をしてゐるに過ぎぬ社會的進化の時代には、その階級は未だ力を用ゐるだけに强くなつてゐないので、それを用ゐないだけに發達しない間は、多少成長の餘地が與へられる。けれども一旦被支配階級の負擔が堪へ難いほどになり、その叛逆が豫想されるほどになると、支配階級は力に訴へる。戰爭はさういふ過重な負擔を勞働階級に負せた。そこで戰爭と共に、勞働階級は平和時代に得て居つた、僅かばかりの自由をすら奪はれてしまひ、幾百萬の勞働者の生靈を犧牲にして、帝國主義の獨裁時代が出現したのである。此獨裁を破らうとして民衆は力を用ゐ、それが革命を惹起したのである。けれども舊い支配階級は、一擊の下に直ちに潰滅するものではない。彼等は一旦敗れても必ず再起を企てる。然も革命の勝利が一擧にして新經濟組織を確立し、舊支配階級の勢力の根柢を覆すものでない以上、再起は必ずしも不可能でない。社會革命は、資本階級を排除することに始まり、資本主義的組織を、勞働者の共產社會に完全に建設し直すことを以て終る、長日月に亘る大事業である。何處の國でも是だけの事業を遂行するには、少くとも三四十年はかゝる。そして此期間が無產階級の獨裁時代に當るのである。師ち此間、無產階級は、一方の手では斷乎として資本家階級を抑へつけ、僅かに今一方の手で、社會主義的建設事業に携はることしか出來ないのである。

何等かの原則を楯として露國無產階級の獨裁にケチをつけることは、單にマルクス說を否認するに止まらず、明々白々の過去の事實をも否認することゝなる。レンナーは、社會主義革命は單に新しい經濟組織を要求するもので、暴力を要求するものでは出來ないと論じ、政治革命即ち暴力の使用は社會主義革命の性質に背くものであるとの見地もなく進べ立てたが、これは彼がうずール流の國家社會主義者ですらもなく、純然たる資本主義的論理家にすぎないことを證據立てるものである。社會主義革命は、一方の階級に無類の特權を與へた、資本主義の全經濟組織を變更しなければならず、隨つて其階級から激烈な反抗を――武器に訴へるほか破ることの出來ぬ反抗――を受けるに極つてゐる。そして資本主義が强大に發達してゐる國ほど、資本家階級の抵抗は激烈で根强く、隨つて無產者革命は、峻嚴に且つ高壓的とならざるを得ない。ところが露國革命に反對する所謂マルクス主義者なる軟體動物は、彼等こそ何も無產階級の獨裁の原則を認めぬ譯ではないが、無產者が國內の少數に過ぎず、獨裁が結局多數者に對する少數者の支配に墮落する恐れのある國で、獨裁を行ふことには反對するのだと主張する。けれどもこれは卑怯な逃口上である。

どこの國でも、人民の大多數が革命を起すことは斷じてない。資本主義は、單に生產機關を壟斷して經濟的に民衆を支配するのみならず、教育や言論の機關を通じて、民衆の大部分を精神的に支配して居る。そこで、あらゆる悲慘や窮乏に遭遇し、戰爭のような大事件に依つて動搖を促されても、虐げられたる民衆が一齊に蹶起することはなく、民衆の中の最も活動的な少數者が、率先して行動を起すのである。そしてその革命が成功すると否とは、それが歷史の必然と一致してゐるかどうか、換言すれば民衆の要求と合致してゐるか否かに依て決するのであつて、もし一致してゐる場合には、一般民衆が舊き支配階級と分離して、革命運動に參加する。一般民衆を覺醒させ、彼等を資本主義の精神的桎梏より解放し、彼等の利益を擁護する運動に投じさせるには、革命の創造的な、衝動的な力が必要である。

總ての場合、革命を先づ起すものは少數先驅者であり、多數者は革命の進行中にそれに參加して、その勝利を決定する力となるのである。若し左樣でなかつたならば、カウツキーのいふ通り、無產者が少數を占めるにすぎぬ露西亞のような國では、獨裁が有害であるのみならず、カウツキーが獨裁を是認してゐる、無產者の多數を占める國の場合には獨裁は無用に歸するのである。さういふ進んだ國々では、資本家階級は極めて少數に留まり無產階級に向つて、武力を以て抵抗するだけの力がない。そこで社會主義實現の必然の徑路として、マルクスの考へた無產階級獨裁論が、今日では全然古くなつてしまつたといへばさにかく、さもない限り、他の國と同樣、露西亞の場合でも、これを批難することは出來ない筈である。